

言語政策研究史の概観

本林響子(東京大学)

1. はじめに／問題の所在と本発表の目的

言語政策・計画に関する研究(以下、言語政策研究)¹への関心が高まる中、日本においても近年活発な議論が行われている。雑誌『社会言語科学』において2019年に特集号「日本語と日本社会をめぐる言語政策・言語計画」(第22巻第1号)が組まれたのは記憶に新しい。また、日本言語政策学会の企画委員会による書籍が出版されている(村岡・上村編 2024)ほか、日本語教育との関連においても島津(2011)、伊東(2019)、神吉(2022)などが言語政策的観点の重要性を論じている。変容する日本社会の現況に鑑みれば、このような関心の高まりは当然の帰結ともいえ、学術分野としての言語政策研究の今後の発展がますます期待されているといえよう。

英語圏での動向に目を転じれば、言語政策研究が蓄積される中で、当該領域のこれまでの展開を整理する必要性が認識されるようになり、近年では言語政策・計画研究の歴史(以下、言語政策研究史)を概観・総括する重要な論考が複数刊行されるに至っている。ただしそれら論考の概観や総括の視点は様々であり、内容も多様である。

本発表では、言語政策研究に関する議論の整理が進むこのような文脈の中で、当該分野で近年起きている二つの現象に着目して論を進めたい。一つは、第二次世界大戦以降2000年代までの時期に関し、研究史が固定化されつつあること。もう一つは、2000年代以降、現在進行形で動的に研究の蓄積がなされ、言語政策概念の拡張が起こるとともに、近年では各領域への分化と収斂の動きが見られることである。

本発表の前半では、第二次世界大戦以降2000年代までの時期に関して言語政策研究史を概観している主要な論考を複数比較検討する。第2節で詳述するように、英語圏において、Ricento(2000)の論に端を発し、第二次世界大戦以降の言語政策研究史を概観する論考が複数出版されている。そのような論考について、各研究者の視点やまとめ方の違いについて詳細に比較検討しておくことは有益であると考えられる。本発表の動機の一つは、研究史が固定化されつつあるように見える中、同時期に分野の歴史を振り返り把握しようとした複数の研究者の動きを、もう少し丁寧にみておく必要があると考えたことである。特に、それまでの過程で取りこぼされてきた議論がないのかどうかを検討する必要もあるだろう。分野が急速な進展を見せる今だからこそ、少し立ち止まって考えるとともに、これまでの言語政策研究における豊かな議論の一端を振り返ってみたい。

実際、ここ数十年の当該領域の展開には目を見張るものがある。特に、2010年代から2020年代にかけて「言語政策」をタイトルに冠する3冊のハンドブック(Spolsky, 2012; Tollefson & Pérez-Milans, 2018; Gazzola, Grin, Cardinal & Heugh, 2024)が相次いで出版されたことは注目に値する。後述の通り、これらのハンドブックはそれぞれ応用言語学的(Spolsky, 2012)、社会言語学的(Tollefson & Pérez-Milans, 2018)、公共政策論および政治学的(Gazzola, Grin, Cardinal & Heugh, 2024)観点から言語政策を研究する編者によるものであり、このことは、近年の言語政策研究における認識論・方法論の多様性を象徴するものと言える。2020年代に入り、認識論的・方法論的に多様な背景を持つ言語政策研究者が協働する動きも一部見られるが(例: Gazzola, Gobbo, Johnson, & de Leon, 2023)、残念ながら課題も多い。本発表の後半(第3節、第4節)では、これらハンドブックを含む近年の出版物の比較検討を通じて、言語政策研究の近年の動的な展開について整理し展望するための一助としたい。

本発表の構成と概要は以下の通りである。

¹ 「言語政策」と「言語計画」の概念的関係性については複雑ではあるが、本発表では木村(2024)に倣い、古典的な定義としてカルヴェ(2000, 2010)等を踏まえた上で、厳密な区分が必要な場合を除いて、日本語でより一般的な用語である「言語政策」を総称として用いる。これら概念および関係性の詳細についてはカルヴェ(砂野他訳 2010/1987)および木村(2005; 2024)、西島(2024)等を参照。

2. 第二次世界大戦後～2000年代に関して：三期区分の定着と研究者間の揺れ

本発表第2節においては、第二次世界大戦以降 2000年代までの時期に関する言語政策研究史の概説文献を比較検討する。2000年代初頭に出版され分野の研究史観に大きな影響を与えたのは Ricento (2000, 2006) であろう。Ricento (2000) の議論では、第二次世界大戦以降の言語政策研究は、新興国の独立を背景とし、課題解決と実用志向の研究が顕著であった第一期 (1960年代～70年代)、第一期への反省と省察を踏まえた批判性および不平等や格差への視点が特徴的である第二期 (1970年代～1980年代後半)、冷戦終結に伴う大きな社会変動を背景に言語の動態性および言語政策の重層性に着目した議論が盛んになった第三期 (1980年代～2000年ごろ) を経て現在に至るとされている。

その後の論文への引用状況を見れば、英語圏での議論が Ricento (2000) を一つの契機として展開したことは疑いようがなく、Ricento の論文は次節で述べるような 2010年代以降の更なる展開の基礎ともなっている。ただし、同時期に他の研究者の間でも歴史を把握しようという動きが見られたこと、また時代が下ってからさらにこの時代についての振り返りが行われていることは、もう少し丁寧にみておく必要があるだろう。

本節で扱う文献は、同時代的なもの3本 (Ricento, 2000; 2006; Wright, 2004; Ferguson, 2006; Hornberger, 2006) と、2010年代以降の文献3本 (Jernudd & Nekvapil, 2012; Heller, 2018; Oakes, 2024) である。これらの比較を通して、近年研究者間の共通認識として確立しつつある時代区分の「ゆれ」と解釈の多様性について概観する。

結論を先取りすれば、この時期に関しては、Ricento (2000) の議論を概ね踏襲し、第二次世界大戦以降の言語政策研究を三期に分けて理解しようという点で概ね共通しているものの、特に第二期における動向の理論的基盤に関する記述や、第三期の動向の社会的背景の認識において、研究者間で差異が見られる。本発表第2節では、先行研究であり論じられることのないそのような差異についてまとめ、今後の研究の基礎資料とする。

3. 2010年代以降の動向：概念的・方法論的拡張と混沌状況

2000年ごろまでの研究動向に関して第2節で述べるような研究史の三段階が共通認識として広まる一方、2000年代から現在に至るまでの四半世紀の間に、言語政策研究がさらなる進展を遂げていることも見逃せない。本発表第3節では、主に2010年代～2020年代の文献を取り上げ、言語政策研究の近年の展開、特に、この頃から顕著となった学際的状況における言語政策概念の拡張とそれに伴うある種の混乱について論じたい。

ここでいう「拡張・多様化と混乱」には多くの要素があるが、本節の前半では言語政策概念の「拡張」を支える理論的基盤となった二つの主張、すなわちマクロ・メゾ・ミクロとして論じられることも多い言語政策の多層性・重層性 (いわゆる「スケール」の問題) および統治性概念に見られるような統治メカニズムの概念変化の影響に着目して論を進める。

本節後半では、これらの理論的背景だけでなく、研究者の研究実践の面からも言語政策研究の多様化を論じたい。具体的には、第2節で扱った Ricento (2000) を一部継承する形で展開された Johnson and Ricento (2013) の論文と彼らによる「言語政策の民族誌」に関する雑誌特集号、および2010年代と2020年代に出版された3冊のハンドブックを手がかりとして、研究者の研究実践において重要な位置を占める研究の方法論についても触れながら、概念的な拡張と多様化の様相を概観する。

4. 2020年代：収斂・収束・分岐と協働および今後の課題

第4節では、第3節で述べたような混沌状況を経て、主に2020年代に入って訪れた分化と棲み分けについて論じる。具体的には、批判性、実践性、民族誌的視点や言説的視点を特徴とする社会構築主義的アプローチの言語政策研究と、公共性、公益性、客観性を旨とする公共政策的アプローチの分化・並立がより顕著となってきていることを示す。また、それらを踏まえた上で、認識論的・方法論的立場が異なる研究者間の協働の動き (Gazzola, Gobbo, Johnson, & de Leon, 2023) に触れつつ、そこで見えてきた課題および今後の展望を述べる。

謝辞 本研究は JSPS 科研費 24K04075 (言語政策研究の方法論の体系化：認識論的対立軸に着目して) の助成を受けたものです。

参考文献

- カルヴェ, ルイ＝ジャン(著)／砂野幸稔・今井勉・西山教行・佐野直子・中力えり(訳) (2010/1987). 言語戦争と言語政策 三元社
- カルヴェ, ルイ＝ジャン(著)／西山教行(訳) (2000). 言語政策とは何か 文庫クセジュ 白水社
- Ferguson, G. (2006). *Language planning and education*. Edinburgh University Press.
- Gazzola, M., Gobbo, F., Johnson, D. C., & de Leon, J. A. L. (eds.) (2023). *Epistemological and theoretical foundations in language policy and planning*. Palgrave Macmillan.
- Gazzola, M., Grin, F., Cardinal, L., & Heugh, K. (eds.) (2024). *The Routledge handbook of language policy and planning*. Routledge.
- Heller, M. (2018). Socio-economic junctures, theoretical shifts: A genealogy of LPP research. In Tollefson, J. W., & Pérez-Milans, M. (eds.), *The Oxford handbook of language policy and planning*. Oxford University Press. (Ch2) pp. 35-50.
- Hornberger, N. H. (2006). Frameworks and models in language policy and planning. In T. Ricento (ed.), *An introduction to language policy: Theory and Method*. Blackwell Publishing. pp. 24-41.
- 伊東祐郎 (2019). 日本語と日本社会をめぐる言語政策・言語計画 ―言語政策から日本語教育を問う― 社会言語科学, 22(1), 4-16.
- Jernudd, B., & Nekvapil, J. (2012). History of the field: A sketch. In B. Spolsky (ed.), *The Cambridge handbook of language policy*. Cambridge University Press. (Ch2) pp.16-36.
- Johnson, D. C., & Ricento, T. (2013). Conceptual and theoretical perspectives in language planning and policy: Situating the ethnography of language policy. *International Journal of the Sociology of Language*, 219, 7-21.
- 神吉宇一 (2022). 公的日本語教育を担う日本語教師に求められるもの 日本語教育, 181, 4-19.
- 木村護郎クリストフ (2005). 言語にとって「人為性」とはなにか―言語構築と言語イデオロギー: ケルノウ語・ソルブ語を事例として― 三元社
- 木村護郎クリストフ (2024). 言語政策とは何か 村岡英裕・上村圭介(編) 言語政策研究への案内 くろしお出版 pp.1-19.
- 村岡英裕・上村圭介編 (2024). 言語政策研究への案内 くろしお出版
- 西島佑 (2024). 「言語政策概念」の多様さ 村岡英裕・上村圭介(編) 言語政策研究への案内 くろしお出版 pp.22-33.
- Oakes, L. (2024). The historical development of language policy and planning. In Gazzola, M., Grin, F., Cardinal, L., & Heugh, K. (eds), *The Routledge handbook of language policy and planning*. Routledge. (Ch2) pp. 35-48.
- Ricento, T. (2000). Historical and theoretical perspectives in language policy and planning. In Ricento, T. (ed.), *Ideology, politics and language policies: Focus on English*. John Benjamins. [Originally published in *Journal of Sociolinguistics* 4:2, 2000, 196-213.]
- Ricento, T. (2006). Theoretical perspectives in language policy: An overview. In T. Ricento (ed.), *An introduction to language policy: Theory and method*. Blackwell Publishing. pp. 3-9.
- 嶋津拓 (2011). 言語政策研究と日本語教育 日本語教育, 150, 56-70.
- 塩田雄大・中井陽子・池田佳子(編) (2019). 特集: 日本語と日本社会をめぐる言語政策・言語計画 社会言語科学, 22(1), 1-3.
- Spolsky, B. (ed.) (2012). *The Cambridge handbook of language policy*. Cambridge University Press.
- Tollefson, J. W., & Pérez-Milans, M. (eds.) (2018). *The Oxford handbook of language policy and planning*. Oxford University Press.
- Wright, S. (2004). *Language policy and language planning*. Palgrave Macmillan.